

美濃方言の原因・理由表現

山田 敏弘

1. はじめに

本考察では岐阜県南部、いわゆる美濃地方における原因・理由表現の記述・分析・考察を行う。

記述していくことは主として、① 美濃地方各地においてどのような原因・理由表現が用いられているか、② 個々の原因・理由表現がどのような意味で用いられているか、という2点である。

その上で、「の」「もの」等体言化形式の介在の有無についての考察も行う。

方法としては、3つの方法を併せて用いる。

1つは、各地に散見される方言で記録された資料における原因・理由表現を見ていく方法である。美濃地方においては揖斐郡旧徳山村、郡上郡明宝村、恵那郡全域で方言で記録された大きな資料が得られている。資料の性質について詳しくは後述するが、これらの資料において用いられている原因・理由表現を自然談話に準ずる資料として使用していく。

2つ目に臨地調査である。上記3地点において大きな資料が得られると言っても、当該地域における話者の意識がすべて反映されたものと言えないことは言うまでもない。それを補う意味で臨地調査によって得られたデータを併せて用いていく。また、今回、方言で記録された資料が得られなかった地域についても臨地調査を行ってあるので、そのデータについても適宜用いていく。

最後に内省である。形式にもよるが岐阜市出身の筆者の母語として内省の効く形式や用法もある。また若い世代の内省を尋ねるために、岐阜県出身の大学生に行ったアンケートの結果も一部用いる。

これら3つの方法を用いながら考察を行う。

2. 資料

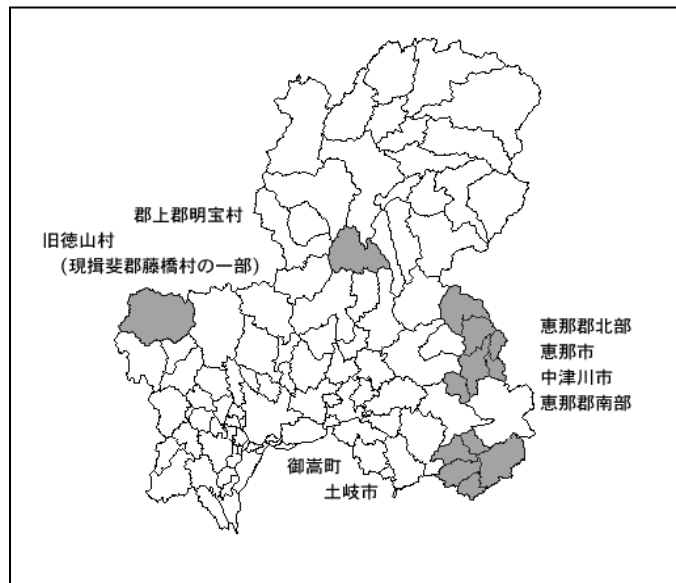
今回は方言で記録された資料として以下のものを分析する。

- 増山たづ子(語り)・鈴木暹編(1993)『まっ黒けの話』影書房(以下「徳山」)
- 大橋和華(1977)『全国昔話資料集成 25 恵那昔話集』岩崎美術社(以下「恵那」)
- 金子貞二(1976)『奥美濃よもやま話 四』岐阜県郡上郡明方村(現明宝村)教育委員会(以下「明宝」)

その他幾点かの資料(文中および参考文献参照)から用例を引用する。

地点としてはおおまかに言って美濃地方の西、東、北の端の3地点である(当該地域は地図上に塗りつぶして示してある)。この3編を選んだ理由は相対的に大きな方言談話資料であることと、最も忠実に方言を映した資料であると考えられるからに他ならない。

方言談話資料から殊に語彙や文法の形式の使用を調べようとする際、その分量が問題となる。小さな方言談話資料からは得られない形式も多い。その点、上記3資料は、1頁あたりの文字数の差、写真や図版等の使用の有無により、単純な比較はで



きない可能性もあるが、いずれも200頁を越える分量が方言によって綴られている。ただし、時間の都合や明らかな共通語意識などにより、当該資料のすべてを今回資料として利用したのではなく、資料として除外したところもあることを断っておく。

内容についてはいずれもその土地の方言で語られたものを採録した形になっている。文字にした段階で厳密には音声によって語られた元の言語のままではなくなっている可能性は否定できない。この点については各著者・編者が次のように述べている。

- 記録はテープレコーダーに取め、その語り口をそのまま文字化するようにしたが、「方言」の微妙な発音を文字で表現するのはほとんど不可能なので、近似の表記にとどめた。不必要な接続詞や話の繰返しを一部削除したところもある。また、全体にわたって増山たづ子さんに目を通してもらった。(「徳山」p. 3)
- 採録にあたっては、テープレコーダーを使い、出来るだけ忠実に、話者の肉声を伝えるように努めました。しかし、同じ話者でも、何度か訪問するうちに、話してあげようという意志がかえって素朴な話しぶりを失わせ、思いだしてメモをとっておいてくださったため、語りのリズムを損うなど、採録のむずかしさを感じました。(「恵那」p. 346)
- 村の古老のかたとの対話を、三時間半あまりつづけられましたが、先生が要領よく話の糸口を整理していかれても、内容が多岐に渡り、話が前後します。あとでその録音を筆記され、それを項目ごとにはさみでバラバラにされ、取捨選択して原稿にまとめあげ、さらに推敲を重ねられるのだ、と伺いました。(『奥美濃よもやま話 一』p. 173)

「徳山」と「恵那」の2資料については、基本的には語りを忠実に書き写したものとされている。「徳山」の同様な資料、野部博子(2000)の音声資料においてもそれほど大きな差

は見られないことは、「徳山」資料が、まったく完全な話しことばではない危険性はあるが、また、個人の言語としての偏りはあるが、その地方で語られる可能性が十分にある語形であることを確認させるものである。

また、「明宝」資料については、1話が10分程度の有線放送番組の下原稿が元になっている。音声資料も残っており、これによって確認されるところも併せると、上記引用にもあるとおり、金子氏が古老の話を再編成してそれを語っているという形式になる。金子氏は同じ郡上郡の出身ではあるが、水系の異なる地域で生まれ育っている。厳密に言えばその違いはどこかに見られなくはないのかもしれない。ただ、明宝に住まわれた時間の方がすでに長く、録音を元に行っていることなどからも明宝の当時の古老のことばとして捉えて何ら問題はないものと考えられる。

以上、資料がその地方の話しことばを完全に写したものでない点を考慮に入れつつも、このような資料を用いるのは、ただただ便法という他はない。ここでは話しことば資料と大差なく扱えるものと考え資料とするものである。

いわゆる昔話や昔語りにも偏っている点については、客観的な出来事描写に加え、その登場人物による発話なども含まれている点で好都合である。命令や依頼の根拠を表す用例も得られるためである。

話者について、「徳山」資料は増山たづ子氏(1917年＝大正6年生まれ)一人である。「恵那」資料には、恵那郡内各地の話者が含まれている。生年はおよそ明治20年前後以降の明治生まれの人である。なお、恵那資料においては、共通語に近い形式を多用する話者が恵那市・中津川市といった市制区域に多く、この両市の話者は基本的には省いた。その上で、指定辞「じゃ」か「だ」かで形式的にも大きく異なる恵那郡北部(恵北)と恵那郡南部(恵南)とに分けて記述を行う。「明宝」資料についても複数の話者のことばとして綴られている。各話の話者について生年などは記されていないが、昭和45年から6年半にわたって続けられた放送の原稿として古老に調査を行われたことを考えると、明治後半生まれの人による語りを中心であるものと考えられる。

このような点で、30年ほどの幅のある資料となっていることは、厳密な意味での共時性を確保できるものとは言えないかもしれない。しかし、それは限られた方言談話資料の中での傾向として見ていただくことを期待したい。

一方、臨地調査においては、次の方々のご協力を賜った(敬称略)。プライバシーの関係上、生年等は示さないが、調査時点(いずれも2002年)で()の中の方2名を除き、60代から80代の方々である。

揖斐郡揖斐川町：小岩道男

揖斐郡藤橋村：岩井静枝

不破郡垂井町：渡辺隆

可児郡御嵩町：安藤憲一、伊左次正彦、木村茂美、木村千恵子、木村富美子、

平井みつこ、佐藤愛子、木村千枝子、田中なよ子、鍵山喜代子、鍵山路子
郡上郡明宝村：千葉多津枝、小田久松

郡上郡八幡町：佐藤とき子

郡上郡和良村：一柳等

加茂郡坂祝町：浦田勝義、兼松三郎、沼田洋子、三品敏雄、竹内一夫、
安西美津子、梅田敏平、(若井水絵、片桐茂樹)

土岐市：鈴木大三、福島則之、林清、山本昭典、荒川孝志、林秀遊

以下の2地点は今回の調査対象地域からは外れるが隣接地であり、参考データとして用いていく。

益田郡金山町：二村千恵子、松原美智子、谷口孝子

長野県木曾郡山口村：二村英弘（ただし、加茂郡坂祝町内における調査）

3. 形式ごとの考察

2節に挙げた3つの資料に見られる原因・理由を表す接続助詞を概観する。

時間的な制約から、「徳山」および「恵那」の資料からはそれぞれの資料の中から原因・理由を表す接続助詞を200用例程度（「恵那」資料については南部・北部各々に200例ほど）を抜き出し、それによっておおよその頻度を見ることにする。「明宝」資料については、第4巻のみテキストデータが活用できたので、特に共通語で語られていると考えられる話者の資料を除いて¹⁾、すべてを範囲とした。

表中のDは指定辞「ダ」「ジャ」「ヤ」を表す。

	デ	モンデ	モンDデ	ンデ	ンDデ	Dデ	ニ	その他	ノデ/カラ
「徳山」	82	23	57	19	11	1	0	6	2
「恵那」北	106	60	13	1	0	0	1	24	6
「恵那」南	100	76	15	0	0	0	0	4	8
「明宝」	489	40	94	4	164	0	2	24	23

表1 各資料に見られる原因・理由接続助詞

なお、共通語の「風邪を引いて学校を休んだ」のようにテ形によって原因・理由が表される場合がある。

- どうゆう訳か知らんが縁がのうて、ほいで一人でおるんじゃ（「徳山」p. 86）

このようなテ形による接続は、基本的には出来事の併存あるいは継起を表すものであり、原因・理由という意味を第一の意味としないものと考えられる。上記方言資料においても確実に原因・理由を意味すると理解される用例はそれほど多くなく、他の用法との区別が困難である場合もあるため、本考察においてはテ形による接続は考察の対象としない。

徳山資料においては「ッデ」という接続助詞も見られる。このような促音で表される音は竹内俊男(1982:39-42)、山田達也(1992)に記述があるように、共通語の撥音に相当する「喉の特殊な破裂音(山田達也:1992:108)」である²⁾。ここでは「ンデ」の類として扱う。以下、形式ごとに考察する。

3.1 デ

[1] 「デ」の基本的な用法

岐阜県南部、美濃地方で最も一般的に用いられる、いわゆる原因・理由を表す接続助詞は「デ」である。

- やい、今日はなあ、馬の子をとって食おうと思ったら、もうるっちゅうもんがおったで逃げてきた。(「恵那」(南) p. 44)
- 随分苦勞もあったが、手があったで、わしら長いこと炭焼きにも行けたんや。(「明宝」 p. 9)
- ほこりだらけで汚いでなあ、ちいっと洗わにゃあかん(「徳山」 p. 21)
- 今日は良い天気じゃで、たき木拾いに行かまいか(「恵那」(北) p. 41)
- その当時、大原は本在所やで家数が二十軒もあつらけんど、小原は六軒ほどしかなかったな。(「明宝」 p. 38)
- 気良の陰地の新五郎さがな、あの人は後生願いで、年に二、三べん京へ参らしたシコやったが、あの人が、わしら二人の名前を書いて持っていかしたで、京へ届けさしたはずや。(「明宝」 p. 9)
- 今朝のお赤飯をふかしたで、どうかあがってください(「恵那」(南) p. 101)
- 暮れの六つに「なも、「嫁に迎えに行くで」なも、「嫁にくれてくりよ」って。(「恵那」(北) p. 61)

上記用例のように「デ」は、出来事の原因・理由を表す用法、判断や働きかけ・意志表出の根拠を表す用法、および理由を表すとは言い難い用法の3種類³⁾が認められる。もっとも広い範囲で用いられるいわゆる原因・理由の接続助詞とすることができる。

名詞およびナ形容詞に後接する場合、指定辞の「ダ」「ヤ」「ジャ」を介在させ、「ダデ」「ヤデ」「ジャデ」となる他、「ナデ」となることもある(この点に関しては4節でまとめて述べる)。

[2] 「デ」と「ので」の比較

当該地域においては共通語の「のに」が「ニ」に対応するなど、共通語の準体助詞「の」の欠落と一見すると捉えられる対応が見られる。この現象と平行に捉えれば「ので」が「デ」に対応しているようにも考えられる。

しかしながら、「デ」は次の点で「ので」と異なっている。

1つは、「だろう」で表される推量の形式に「ので」は後接しないが「デ」は後接する点である。今回の資料の中には見あたらなかったのが、内省による作例を示す。

- 雨、降るやろ(う)で、傘持ってけ。

もうひとつは強調構文など、出来事の原因・理由を表す節がその帰結を表す後件よりも後に来る場合にも「デ」が用いられることである。

- こんに、おれのこまめになったのは、赤坂におったでや。(「明宝」p.116)

共通語の「ので」にはこのような用法がなく「*ーのは、のでだ。」ということはいできない。

実際に、「デ」の用例は倒置された用例も多く、また、帰結節を伴わず終助詞的に用いられているものも多い。

- 「佐平治山にや木があるぞ。タキモンは、奥長尾の山で切らせたで。」(「明宝」p.4)
- 「わしゃ、今から関へ帰るんやが、なんなら、わしと一緒に行かんかな。関まで行きゃ、馬屋は、いっくらでもあいとるで。」(「明宝」p.72)

3.2 モンデ、モンDデ

表1で見たように美濃地方の接続助詞として「デ」について用いられているのが「モンデ」「モンDデ」である。

[1] 用例数の比較

共通語の口語で「ので」が「んで」になる現象と平行に考えれば、共通語の「もので」がそのまま方言で音レベルにおいて「モノデ」に対応しているように一見すると考えられる。しかしながら表1に示したように美濃方言の「モンデ」は「デ」と比較して及ばないまでも数量的にかなり多く、「モンDデ」を含めればむしろ「デ」と同じ程度で用いられている⁴⁾。

共通語においては「もので」はこれほどの使用頻度では表れない。話しことばが多く用いられるシナリオ脚本から検索して調べたところ、「から」だけでも2000例近くあったのに対し、「もので」はやや女性の丁寧な話しことばとしてなど12例、「もんで」の22例を併せても34例のみであり、共通語の「もので・もんで」はいわゆる原因・理由表現の1%も用いられていない少数派である。

昔話については大きな資料を吟味する時間がなかったため、インターネットサイト「日本の昔ばなし⁵⁾」で簡単な検索したところ、接続助詞としての「から」は14例(「からには」2例を含む)、「ので」は13例であったのに対し、「もんで」「もので」は1例も見あたらなかった。

いずれにしても美濃地方の「モンデ」類は、共通語の「もので」類と比較して、圧倒的に多く用いられる傾向にある。

[2] 「モンデ」の基本的な意味・用法

共通語の「もので」は後件に、「主節の述部が意志・希望・命令・禁止・勧誘などを表す場合には『もので』は使えないのがふつう(佐竹久仁子(1984:90))」で「前件の理由・原因が予定外・意外・不本意・予想以上の程度のものであって、自分の責任ではないのだという気持ちが込められる(同:90)」であり、「自然現象や客観的事象を述べる文に『もので』を使うと不自然である(同:91)」ことが知られている。

今回の資料に見られた「モンデ・ムンデ」も、出来事の原因・理由を述べる文脈で用いられているものがほとんどである。これらは「デ」で言い換えることができ、共通語でも位相的ニュアンスを除けば「もので・もんで」で言っても文法的に奇異であるとは感じられない。

- 水を飲みかけても、自分の姿が赤いのが映るもんで、上へこうやって向いとるんやて。(「徳山」p. 64)
- 一粒なら、豆は世話なしではさめるで、豆は全部食べれるけど、本の子は二粒もはさんで食べれんもんで、一粒も食べれなんだそうだ(「恵那」(南) p. 139)
- 内の人、八幡で死なしたで、密葬してきて、一月も留守にしとったもんで、家の掃除やらまわしがえろうてな。(「明宝」p. 44)

このような「モンデ」は判断の根拠を表す用法と思われる用例は次の1例を除いて今回の資料には見られなかった。

- そうして後からびっこみたいなものがついてきようげなもんで、ええ着物をもらって子馬を一匹もらってきよいでるにちがいないと思って見とるうちに(後略)「恵那(南) p. 118)

岐阜大学教育学部の学生 25 名に対する調査(2002 年 6 月 4 日実施)では、次のように後件に働きかけの表現が来る場合でも方言としての「モンデ」は許容されやすい傾向にある。

- 用紙が濡れてまったもんで乾かそう。(自然 12 名、やや不自然だが許容 9 名、不自然 4 名)
- 時間がないもんで急いでください。(自然 19 名、やや不自然だが許容 4 名、不自然 2 名)

後件に推量が来る場合には相対的に自然とするものが少なかった。

- 星が出ているもんで、明日はいい天気やろう。(自然 7 名、やや不自然だが許容 10 名、不自然 8 名)

同じ学生に共通語で「星が出ているもので、明日はいい天気だろう」を判断してもらったところ、自然 1 名、やや不自然だが許容 1 名、不自然 23 名という結果が出た。このことは方言における「モンデ」の用法の広さを表したものと考えることができる。

一方で、次のような「モンデ・ムンデ」は共通語の「もので」では言い換えにくい。

- 大黒柱にさわったら、ちょっとぬくみがあったげな⁶⁾むんでなも、切ったら、血が出

ただって。(「恵那(南) p. 160)

- そんななんでも、明日は、運行機の櫓をガンドで引き切るなんていうシコやったもんで、河野は、警察へしてまったんや。(「明宝」 p. 13)
- その畑がまた、石一つないでな。田圃土みたいにねばねばでな、アルカリ性やもんで、雨が降ったっていうと、ねばりついてまってよ、ゴム足袋なんか穿いたら歩けやせんで。(「明宝」 p. 92)
- 熊汁を作ったんじゃ。ほしたら、子供んとうがいっぱいじゃもんで、みんな食ってまったんやなあ。(「徳山」 p. 26)

上2例は、様態の「ようだ」および伝聞の「そうだ」に相当する表現形式「げな」や「しこや/やった」を含む。共通語ではこのような様態や伝聞形式に続く場合、「*暖かみがあったようなもので」や「*のこぎりで引き切るそうなもので」とすることはできない。また、下2例も「?アルカリ性なもので」や「?子どもがいっぱいなもので」とはしにくく感じられる。これらは佐竹(1984:91)の述べる「客観的事実を述べる文」であるためと考えられる。

このような点で美濃地方の「モンデ・ムンデ」は共通語の「もので・もんで」よりも広い環境で使われ得るものと考えられる。

[3] 「モンデ」の談話的な用法

[2]で指摘したような広い環境での使用だけで、今回のような頻用をすべて説明することはできない。頻用されるのは個々の2文の接続ではなく、むしろ談話における文連続においてである。

前田(1996)では、三尾砂(1958)の「はっきりとは原因理由であることを指し示さない」という指摘を受け、「モノデ・モノダカラは、単に因果関係を婉曲的に表現したというだけではな」く、「話者が因果関係を設定しているという意味合いが強い形式である(前田1996:127-128)」と指摘する。

今回用いたような物語り文においては因果関係があるから「モンデ」を用いるのではなく、逆に話し手の「因果関係としてつながりのある文として語りたい」という気持ちが、因果関係を設定しうるような継起的な2つの出来事間での多用につながっているのではないだろうか。

次例を見られたい。

- 「殿様の前へ行って一ぺん屁をひってみよ」って言わしたむんで殿様の前へ行ってしゃがんどって、見えんように臍の尾んぼを引っぱると、「チンチンカラカラトウトウミ　とうのの金がみな欲しい」ちゅうげなむんでなも、「こりゃあ面白い」ちって、殿様が何べんも鳴かせといて、ご褒美をどっさりおくれたっげなむんでなも、喜んで帰って行かしたげならなも、隣の欲の深いお爺さんがそれを聞いてなも、そんな尾んぼのことなんか知らんむんで、殿様の藪行って竹を伐っりょうると、「誰が竹伐る！」

って叱ったむんで、ほいで、「いつもの屁ひり爺でございます」ちったむんで、「ほんならここへ来てひってみよ」って（後略）（「恵那(南) p. 119-120）

上例の「ムンデ」は、テ形による節連続、あるいはタ形やそれに「それで」や「すると」のような接続詞を併せて用いたものと言い換えることも可能である。このような「ムンデ」は前件が後件に従属するのではなく、出来事の継起を表すマーカーのようなものと捉えられる。

[4] 「モンDデ」

指定辞を伴う「モンDデ（モンダデ・モンジャデ・モンヤデ・ムンダデ・ムンジャデ・ムンヤデ）」は、表1に挙げたように「徳山」「明宝」資料に特に顕著で、用例は「モンデ」の2倍ほどもある。

- 痛うてかなわんもんじゃで尻尾を出いてなあ（「徳山」 p. 21）
- 今日は暑かったもんやで、戻って来たんじゃ（「徳山」 p. 99）
- わしんとこの田圃があそこの前にあったもんやで、ちょっと刈るにゃ早い刈ってくだれって頼ました。（「明宝」 p. 7）

筆者自身の内省の効く範囲においてはではあるが、「モンDデ」は「モンデ」と置き換えても、何ら意味は変わらない。また、得られた資料にも「モンデ」と同様、後件には判断や働きかけ・意志表出の形式が来るような用例は見られなかったし、また、「デ」にあるような理由を表さない用法で用いられている用例も見あたらなかった。

一点違う点があるとすれば、今回用いた美濃方言資料においては「モンデ」が文末で用いられる用例はあまり多くないが何例か見られる一方、「モンDデ」が文末で用いられる用例は見あたらないう点である。

- （蛇嫁の話）「お母さん、わしの廊下のところへ、盥に水を一杯持って来ておいてくりよ」って言ったげなむんでなも、何のこっちゃわからんけどなも。「そのかわり、わしの寝床をば、誰もぜったいのぞかんでくりよ」ってなも。そうやって、「寝てくれちゅったむんでなも。（「恵那」(北) p. 62）
- （猿蟹合戦の話）山から猿が来てなも、ほいで、柿のええのばっかとして食べて、蟹がそばで、「わしにも一つください」てっても、ちよつともくれんもんで。（改行）そうしとると、「よし、よし」てってなも、渋柿をぶつけるちゅうと、蟹がつぶれちまうてなも。（「恵那」(北) p. 31）

これらはいずれも前後の文脈に帰結に相当する表現を持たないが、地の文で用いられていることもあり、終助詞とまで言い切れるものではない。

3.4 ンデ、ンDデ

「ンデ」は前節の「モンデ」と同様、原因となる節をいったん名詞化した上で助詞に結

びつける方法で得られたものと考えられる。「ンDデ」はさらに「のだ」を介した形、すなわち共通語に対応させれば「のだから」に対応するものと捉えられる。

[1] 分布

このような準体助詞を含んだ「ンデ」「ンDデ」は「恵那」資料には観察されない。「徳山」資料においては「ンデ」が約1割、「ンDデ」がその半分ほど観察される。「明宝」資料においては「ンデ」は840例中の4例とほとんど数にならないが、「ンDデ」は164例と全体の約2割と相対的に見てよく使われる形式である。

これほどまでに地域差のある形式も珍しい。確定的なことは言えないが格助詞から接続助詞への発達の過程で準体化形式が必要とされた際、相対的に西の方で「の」を介することが広まったのかもしれない(指定辞との絡みで第4節でも触れる)。

[2] 「徳山」資料を中心とした「ンデ」

「ンデ」が多く観察されるのは「徳山」資料である。なお、前述の通り、「ッデ」(3例)もここに含めて考える。「ので」(3例)は含めていない。

- 「そうか」ってゆうんで、ほれで川瀬はそのかますを追うんでなあ(「徳山」p. 37)
- 汗が一杯吹き出いとるししるんでなあ、二人ながらびっくりしてまって(「徳山」p. 51)

用例自体が少ないので何とも言えないが、「ンデ」は全体が過去で語られる物語の中であっても動詞の非過去形に付くことが多い(16例中13例、残り3例は形容詞の非過去形、タ形、トル形が各1例ずつ)。

「ッデ」の方は3例中2例が後件の省略された文末位置で用いられる。

- われによいよいもんやるっで(「徳山」p. 90)
- 御馳走いっぱい入れてきたっで(「徳山」p. 90)

いずれにしてもこれだけの用例数で傾向を見るのは不可能である。

[3] 「明宝」資料に見られる「ンDデ」

「明宝」資料においては「ンDデ」が164例と、前節3.3で見た「モン」を含む接続形式とほぼ同量見られる。

- 世の中が進んだんやでしかたがないが、しかし、もうちょっと単純化せないかな。(「明宝」p. 21)
- 山やなん、当時は、家で焚くタキモンがありさいせりゃえかったんやで、組合の衆も、だーれも受け手はなかったんや。(「明宝」p. 4)

上例のような後件を伴う「ンDデ」は「明宝」資料においてはむしろ少数派(「ンヤデ」に関しては141例中24例が後件を伴う)であり、大多数は次のような文末で使われる例で

ある。

- 佐次郎というおっさまは、大工でもかなりの腕やったが、一生、家のおっさまで果てさしたんやった。その時分は、村へ厄介かけずにやっていけるように、ちゃんとしてやるだけの力がなげにゃ、新家は出せなんだんやでな。（「明宝」 p. 4）
- 政吉つあが大隈さんに爆弾を投げつけたってな。（改行）政吉つあは、わりと早う刑務所から出てきたんやでな=B（「明宝」 p. 20）

このような後件を伴わない「ンDデ」は「のだから」とは必ずしも同じ振る舞いを見せない⁷⁾。たとえば、上の「明宝」資料に見られる4例のうち、「のだから」で置き換えても自然であるのは1例のみである。

- 世の中が進んだのだからしかたがないが（後略）
- ? 当時は、家で焚く薪がありさえすればよかったのだから、組合の人たちも、誰も受け手はなかったんだ。
- ? 佐次郎という次男は、大工としてもかなりの腕であったが、一生、独立しなかった。ちゃんとしてやるだけの力がなければ、分家は出せなかったのだからね。
- ? 政吉が大隈さんに爆弾を投げつけたという話だ。（改行）政吉は、わりと早く刑務所からでてきたのだから。

「？」を付けた3例のうち、文末で用いられている後の2例は、むしろ共通語の「のだ」に置き換えると自然である。

- 佐次郎という次男は、大工としてもかなりの腕であったが、一生、独立しなかった。ちゃんとしてやるだけの力がなければ、分家は出せなかったのだね。
- 政吉が大隈さんに爆弾を投げつけたという話だ。（改行）政吉は、わりと早く刑務所からでてきたのだ。

「明宝」資料にも「のだ」に相当する「ンヤ」は頻用されていることが観察される。このような文末で用いられる「ンDデ」は、文末形式である「ンヤ」に類似する用法をもちつつも、「ンヤ」より因果関係を明示的に補足したいときに用いられているものと考えられる。

残る「？」を付けた2例目の「当時はー」については、後件が働きかけや広い意味での判断ではない述べ立ての文となっている。非文末で用いられているため、単純に「のだ」と置換することはできないが、発想は、「当時は、家で焚く薪がありさえすればよかったのだ」+「組合の人たちも、誰も受け手はなかったんだ。」という2文の組み合わせと考えることができる。このような後件に述べ立ての文がくる「ンヤデ」は今回資料とした範囲ではこの例1例のみであったことから考えれば、話しことばゆえの臨時的な運用であった可能性が強いと考えられる。

3.4 Dデ

[1] 資料に見られた「Dデ」

第4節で詳述するが、動詞やイ形容詞といった述語になる場合に指定辞を必要としない用言が直接指定辞を含む形式に続くことが、美濃地方においては散見される。動詞やイ形容詞が「ヤデ」「ジャデ」といった接続形式に直接続いていく用法も、多くはないが観察される。

今回用いた資料においては、「徳山」資料において1例のみ見られた。

- 安八太夫の家があるじゃで、そこへ里帰りをした（「徳山」p.83）

当該地域における詳しい用法等は分かっていない。

[2] 曾根彩恵子(2000)の観察

東濃西部の土岐市を中心とした地域ではこのような名詞・ナ形容詞以外に後接する「ヤデ」が曾根彩恵子(2000)に詳しく報告されている。

曾根(2000)は「ヤデ」の用法に関し次の2点を大きな特徴として挙げている。

① 前件の主語は聞き手を含む

- これから出かけるやで、早よまわししやー（曾根 2000:152 原文は片仮名漢字交じり文 以下同じ）

次の用例のように聞き手単独でもよい

- あんた 久しぶりに 車運転するやで、気をつけやーよ（同:153）

② 従属節は「意志的な行為・動作を表す動詞以外は使うことができない（同：155）」

- *風邪ひくやで、家ん中入ってりやー
- *あんたは すぐ怒るやで、もっと我慢しやー
- *あんたは計算力が人より劣るやで、もっと頑張りやーよ
- *あんたはすぐ忘れるやで、メモしときやー
- *あんたなら出来るやで、頑張りやーよ
- *昨日はよー遊んだやで、今日は勉強しやーよ
- *あんたじゃ届かんやで、お父さんにやってもらやー
- *蚊にさされるやで、長袖着てきやー
- *あんたはいつでも友だち待たせるやで、早よ行きやー
- *毎日よー働いてくれるやで、今日は休みやー（同:154-155）

形容詞が従属節に来ないのもこの理由によるとする。

[3] 調査結果から得られた前件の主語と後件のモダリティ制限

今回、土岐市内4地点(泉町久尻、下石町、鶴里町細野、鶴里町柿野)で臨地調査を行い、また、土岐・多治見両市の教育研究所の協力を得て東濃西部地域で33名から回答を得た。

その結果、曾根(2000)の主張通り、前件の主語が聞き手を含む場合にのみ許容されることが確認された。

後件のモダリティ制限についても基本的に曾根(2000)の観察の通り聞き手に対する命令表現が使われるが、筆者自身の調査では、広い意味で聞き手の行動を促す形式であればよいようである。

- まーすぐ出かけるやで、早よまわし{しれ/しやー/せなかんよ/した方がいいんやないか}。
- *まーすぐ出かけるやで、車で送ってったろか。

上のように命令の他、当為判断の形式を用いて促す場合でも「ヤデ」は用いられる。一方、下の例文のように後件が促しの表現でない場合、前件の「出かける」を聞き手であるとしても、やはり不自然との回答を得た。

[4] 前件における主語の動作に対する意志性

問題は②として挙げられた従属節の意志性である。

前件が否定の場合⁸⁾、以下の2例とも使用できるという人は0であった。

- あんたじゃわからんやで、誰かに聞いてりやー。
- あんたが言い張って考えを曲げんやで、勝手にしやー。

特に後者の例文では意志的な行為の非実行を表すために否定が用いられている。意志的であろうとなかろうと否定の場合「ヤデ」を用いることはできないものと考えられる。

また、曾根(2000:155)では使用可能とされるトルを用いた用例は使いにくいようである。

- 火使つとるやで、火事にならんよーにしやーよ (曾根 2000:155)

今回の調査では使用可との回答は33名中2名、自身は使用しないが聞くという人も2名であった。

次のような用例も1名が自身は使用しないが聞くと答えたのみであった。

- *あんたいつも働いとるやで、今日ぐらい休みやー。

曾根自身の論では意志的な行為・動作にしか「ヤデ」は用いられないとするので、このような「トル」に「ヤデ」は後接しない方が本来望ましいはずである。「トル」は最も典型的な状態化形式であり、その意味するところは形容詞に近い内容であるはずだからである。

多少インフォーマントによる、あるいは地域による差があることも考慮に入れる必要もあるだろうが、以上のことから、動詞に直接後続する「ヤデ」は聞き手を含む動作者の未実現の意志的行為に対する認識を根拠に、聞き手に行動を促すという用法を持つものと言えるであろう。

[5] 周辺形式との関係

「ヤデ」が使われる環境が分かったところで、なぜこのような形式が用いられなければ

ならないかについては答えが得られたわけではない。

「ヤデ」は一般的な形式として「デ」とはどのように違うのであろうか。

この点について今回得た証言は次のようなものである。すなわち「文化会館行くで、はよまーししやー」と「デ」を用いた場合、誰が行くのかということが即座には判断できない。それに対して「文化会館行くやでー」と言えば、それは話者以外の人物となる。このような「誰が行くのか」ということが「ヤデ」と「デ」を使い分けることによってよりはっきりするというものである(下石町のインフォーマント)。

しかしこれは根元的な「ヤデ」存在の理由にはならない。そこで終助詞の用法から考えてみる。

終助詞としての「ジャワ(・ダワ)」は以下の用例の通り、意志動詞に後接した場合には聞き手に対する促しの表現となる。

- 行きたかったら、行くじゃわ。

指定辞は文末で用いられる場合、断定という機能を担う。聞き手が意志的に起動しうる行為を断定的に述べることで聞き手に対して促す機能を得たのが「ジャワ(・ダワ)」であると推測される。

このような終助詞としての「ジャワ(・ダワ)」の性質から考えれば、同様に指定辞+格助詞「デ」から形成されている「ヤデ」が、意志動詞に後接して聞き手に対する促しというモダリティと関連を持つことは十分に予想されうる。

もう1つ重要な点は、この地域では「ンヤデ」を用いないという証言である(泉町および鶴里町のインフォーマント)。

- おまはん、今日、塾行く{デ/ヤデ/*ンヤデ}、夕飯外で食べやー。

であれば比べるべきは「のだから」の用法と「ヤデ」である。「のだから」については野田春美(1997:176-190)に詳しい考察がある。ここで詳しく触れている余裕はないが、後件のモダリティ制限や前件の情報が聞き手にとって既知でなければならないという制限などは、東濃西部地域で用いられる「ヤデ」と共通するところである。

3.5 ニ

[1] 美濃地方における接続助詞「ニ」の意味と今回得られた用例

美濃地方において「ニ」は、後件が働きかけのモダリティ以外であれば通常、逆接の接続助詞「のに」に相当するものとして用いられる。

雨降つとるに出かけてった。

ただし、後件が依頼、命令、勧誘など聞き手の行為を促す働きかけのモダリティの場合、文脈によっていわゆる「『理由』の意味(南不二男 1975:258)」でも用いられる⁹⁾。

今回資料とした範囲に見られたのは以下の用例のみであった。

- おんしゃ頼むに猿の嫁になってくれんか(「恵那」(北)p.71)

- なーに、なんとかなるにやってみよよ（「明宝」 p. 20）
- そうやが、まーず大きいに見てきなれ。そんなあり立っとるね。（「明宝」 p. 86）

この他に、同じ「恵那」資料ではあるが、共通語的な文体が多いとして採らなかった恵那市話者の箇所にも次のような理由を表す「ニ」が見られる。

- 「お小僧、痛いにそっそと洗え。和尚いこ見るな」（「恵那」 p. 148）
- 「おい、もうたまらんにやめてくれんか」（「恵那」 p. 215）

上の例はいわゆる「文福茶釜」（恵那資料では「茶釜と商人に化けた狐と狸」という話の中に出てくる狐の発話（恵那資料では茶釜に化けるのは狸ではない）であるが、同様の発話が前ページから繰り返されている。興味深いのは、最初の2回が「お小僧、痛いでそっそと洗え」と「デ」を使っている点である。このことは機能的にこのような「ニ」はまったく冗長的な存在であり「デ」に置き換わるだけの十分な素地を持っていると言ってよい。

この他、可児郡御嵩町の『じいさまから聞いた話』にもこのような「ニ」がいくつか見られる。一例のみ挙げる。

- こういう時代になって狸が化けるなんという事や、化かされるなんて、そんなばかげた事があるもんか。もしそういう狸がおったら、わしんどこへそう言って来い。樫の棒でブンなぐってやるか、股の間にぶら下げとる大きいやつを蹴り上げてやるに。
（同： p. 186）

[2] 「ニ」が表す「原因・理由」の意味と倒置の有無による分析

このような理由の意味で用いられる「ニ」については、筆者自身の母語にもありある程度の内省が利く。数地点の調査結果からわかったことと併せて述べておきたい。

「ニ」は従来「(原因・)理由」を表す接続助詞として岐阜方言および名古屋方言の記述などにも見られる¹⁰⁾。

しかし、本当に「(原因・)理由」を表しているのであろうか。前述の通り、接続助詞「ニ」が用いられるのは後件が依頼、命令、勧誘など聞き手の行為を促す働きかけのモダリティの場合に限られている。この場合、後件の働きかけ表現にとって前件は「原因」とはなり得ない。せいぜい前件は後件における働きかけの「理由」、言い換えれば「根拠」と言えるものでしかない。

さらに、蓮沼・有田・前田(2001)における後件にこのような働きかけのモダリティを伴う「ので・から」の分類に従えば、次のような場合に「ニ」が使用可能であると考えられる。

[発言・態度の根拠]

- 危険です{から/ので}エスカレーターで遊ばないでください。
- 風邪をひくといけない{から/ので}、厚着をして出かけなさい。

[理由を表さない用法]

- すぐもどってきます{から/ので}ここで待っていてください。
- 車を呼んであげる{から/ので}、すぐに病院に行きなさい。
- 月末までに必ず返す{から/ので}、1万円貸してもらえないか。

[「から」による慣用表現]

- お願いだから、もっとまじめに勉強して。
- いい子だから、おとなしくしているのよ。

上記用例に準拠して今回は次のような用例について調査を行った。いずれも「から」に相当する箇所を「ニ」で言えるかどうかを問うものである。

- ① 「雨が降っているから傘を持って行きなさい。」
- ② 「泊まって行きなさいよ。雨が降っているから。」または「傘を持って行きなさいよ。雨が降っているから。」
- ③ 「危ないから川で遊ぶな。」または「危ないから川の方へ行ってはいけないよ。」
- ④ 「川の方へ行ってはいけないよ。あぶないから。」
- ⑤ 「すぐ返すから、ちょっと千円貸して。」
- ⑥ 「ちょっと千円貸して。すぐ返すから。」
- ⑦ 「頼むからお金貸して。」

揖斐郡揖斐川町、同藤橋村(現 揖斐川町藤橋)、不破郡垂井町、郡上郡明宝村(現 郡上市明宝)、郡上郡和良村(現 郡上市和良町)では①②③および⑦について尋ね、次のような回答を得た(○=使う、△=使わないが聞く、×=使わないし聞かない)。

地点(調査当時の名称)	①	②	③	④
揖斐郡揖斐川町	×	×	×	○
揖斐郡藤橋村	×	×	×	○
不破郡垂井町	△	○	×	○
郡上郡明宝村	○	○	×	○
郡上郡和良町	○	○	*	○

表2 西濃・中濃地域におけるニの使用の可否

「*」で示したのは「倒置であれば使用可」という回答である。

この調査の後、東濃地方でやや大きな調査を行った。回答者は東濃西部地域在住の20代から60代までの33名である。その結果を次に示す。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
○	6	13	4	9	4	11	19
△	5	7	4	7	8	7	8
×	22	13	25	17	21	15	6

表3 東濃西部におけるニの使用の可否

網掛けをした②④⑥が倒置された用例であるが、それぞれ対応する①③⑤よりも許容されやすい傾向にあることがわかる。また、表2表3いずれにおいても⑦の慣用的な用法が最も許容されやすく、理由を表さない用法や発言・態度の根拠の用法は許容されやすさにおいて顕著な差は認められなかった。

[3] 「から」に相当する「ニ」の用法の変遷(仮説)と今後の課題

[2]に示した調査結果から、「から」に相当する「ニ」は倒置されたほうがされない場合よりも許容されやすいこと、理由を表さない慣用的な用法がもっとも許容されやすいことの2点がわかった。このことは何に由来するものであろうか。

歴史的な経緯に関し、逆接および目的以外の接続助詞「ニ」については方言的な位相を強く持つため管見の限り記述はほとんどない。新版『日本国語大辞典』によると接続助詞の「ニ」には並置、順接条件、逆接条件の3つが挙げられているが、格助詞「ニ」から派生したことを考えても「ニ」は並置が原義であろう¹¹⁾。

慣用表現のように前件が積極的に後件の根拠と解されないような用例の使用が広いことは、このような並置された前件が根拠を表す用法を本来的には持たなかったものが西濃を除く地域で持つに至ったか、あるいは西濃を含めて後件に特定のモダリティを取る場合に「から」に相当する位置に広く「ニ」を用いていたのが、西濃においては慣用的なものを遺して廃れていったかのいずれかであると考えられる。今のところその決定ができるだけのデータは持っていない。

また、今回は差が現れなかったが、慣用的な用法の他に理由を表さない用法が、発言・態度の根拠の用法よりも広く使われていることも予想される。この点も併せて今後の調査課題としたい。

3.6 ニヨッテ

今回使用した資料において、「明宝」資料および「恵那」資料(北)において、原因・理由を表すものと考えられる「ニヨッテ」を含む例文がおのおの4例と1例、観察された。また、今回資料としなかったが御嵩町の資料にも4例「ニヨッテ」が観察された。

(複合)接続助詞としての「ニヨッテ」は芥子川(1971:212)によると、京坂語から流入し明治以降名古屋では用いられなくなったとのことである。このような表現が可児郡、恵那

郡、郡上郡のような東海地方の周辺地域で見られること自体、なんの不自然さもない¹²⁾。

[1] 出来事の原因・理由を表す「ニヨッテ」

「明宝」資料では次のような用例が観察された。

- 他出っっていうことは、人にもものが貸せとうないによって、二階へ上がって節穴から見ておることや（「恵那」（北）p. 211）
- そんなふうやしよ。七まんた、その上に、団の現場監督っていうと、最高の責任者やによって、わしが判断するには、満人にも、朝鮮人にも、やっぱ、反感もたれるかもしれんと思わしたんやろうも。（「明宝」 p. 98）
- 七まは、ええ人やによって、正しいことに堅かっただけやで、そんなこたないんやけど、あの人は、そういうことをいちばん苦ししたんやろう。（「明宝」 p. 98）
- これまでの段階は、親戚同士の楽話で決まるもんじゃによって、そう堅いことはないけど、祝儀の座敷になるといと、ちった形にはまったことも言わんならん。（「明宝」 p. 128）
- 昔はな、飾り物が少ないによって、枕勤めをせるといと、飾り替えて、表へ出いて取置をしたんや。（「明宝」 p. 138）

用例が少なく確実なことは言えないが、上記の「ニヨッテ」は出来事の原因・理由を表す用法として用いられており、いずれも後件は述ベ立ての文である。

また、特に文体的に硬いというわけではなく、普通の話しことばにおいて得られたものである。芥子川(1971:212)では後期江戸時代の名古屋で「ニヨッテ」は一部を除いて「名古屋の庶民のことばである。熱田の遊里はもちろん、広く庶民の間で用いられたことが明らかである」という特徴を持っていたと述べられており、共通する特徴を有しているものと考えられる。

[2] 出来事の原因・理由を表さない「ニヨッテ」

御嵩町の『じいさまから聞いた話』にも以下の4例の「ニヨッテ」が見られる。

- 「こんなかわいいよそさまの大事な娘さんを、馬から落といて顔に傷をつけたら申し訳がないによって、ちょっときついか知らんが辛抱や」（同 p. 90）
- お前たちは熱心に私を信心しておる。その気持ちがようわかったによって、願いをきき届けてやろう。（同 p. 176）
- 「これで村の衆はみんなお集りかな。それでは、これから雨乞いの式を始めまするによって、みな衆もわしと一緒にしておがみなされや。」（『じいさまから聞いた話』可児郡御嵩町 p. 15）
- 「熊野三社大権現さま、どうかこの病気が一日でも早うなおるように、神様の力でお助け下さい。なおいてくだされたら、村中、できるだけのことをしますし、一日おこ

もりをしてお礼をしますによって」(同 p. 52)

資料で用いられている方言について著者の可児一郎氏に伺ったところでは、古老から聴取した昔話を若い人が分かるように書き直したもののことであった。可児氏自身のことばとして「ニヨッテ」はないとの証言を得ているので、御嵩町の古老の話にこれらの語があったと考えてよいだろう。

ただ、[1]で見た用例とは異なり、可児郡御嵩町の資料においては、儀式のような場面や、話しことばであってもやや鄭重なニュアンスを伴って用いられている点で差異を呈している。名古屋の話しことばと同一の流入経路によってこの地方に広まったというよりも、何らかる格式を伴った媒体を通じて一部には広まっていったことも考えられる。

文体もさることながら、[1]の用例と異なる点で重要なのは、上記の用例がいずれも出来事の原因・理由を表すとは言い難い用法として用いられている点である。上の2例は後件で表される「辛抱しろ」という働きかけや「きき届けてやろう」という意志表出の根拠を表しているし、後者2例は理由を表さない用法と言えよう。いずれにしてもこれ以上のことは分からない¹³⁾。

3.7 その他の形式

今回、広い意味での原因・理由を表す形式としては次のような形式も見られた。

3.7.1 「ワケ」類

「わけで」は引用形式「という」「って」を前接させ「というわけで」という形で共通語でも原因・理由を表す表現として用いられる。今回、資料とした3文献にも幾例か見られた。

- 「(前略) 寝床へは寝せとけん」ちゅうわけで、馬屋の二階へもってって下男を寝せといた(「恵那」p. 211)
- そいじゃあもらおまいかってわけで、人を頼んでわたりをつけたわけだ。(「恵那」p. 202)
- 板の間も、ほん昔式ならええけんども、中途半端んなった時がいちばん厄介やったな。祝儀のごつつおーやなん、茶碗蒸しなんか作る段階に、なんにも知らずにおって、あそこにあつたで作らんなんというわけで始める。(「明宝」p. 141)

いずれも他者の発話内容を後件の出来事を生起させる理由として表す場合に用いられるという用法上の特徴を有している。

資料から伺われる地域的な偏りについて、個人個人の癖などの理由も考えられるが、「徳山」資料が1、相対的に見て大きな資料である「明宝」資料が6例であったのに対し、「恵那」資料が北部が14例、南部が3例と相対的に多いという傾向が見られた。

3.7.2 「コト」類

数として表1には含めていない(理由は後述する)が「こと」を含む形式が原因・理由を表すことがある。

- お隣の村で子供が生まれたということだで見に出かけたが……(「恵那」(南) p. 100)
- 吉太郎さんの方もまんざらじゃないちゅうことで、いよいよ話が成立してなも、(「恵那」(北) p. 202)
- そりゃあ木兵衛さんは百姓をすることやで別にそう頭は利口でなくてもーそれで結構や(「恵那」(北) p. 202)
- 米も運び終わったでいいだろうちゅうことで、言いがかりをつけて来た。(「恵那」(北) p. 252)

「恵那」資料には上記4例が見られたのみであり、相対的には少なく、また「徳山」資料には見られなかった。最も「こと」を含む形式が多かったのは「明宝」資料であり、次のような用例が見られた。

- 運賃が四、五十円いったと思う。千円こさえて向かやよかろうということでな、持ち山の木を売って千円こさえて始めたが、ちょうど瓦の分三百円が足らでよ。(「明宝」 p. 11)
- そんで、なんにも手柄はないが、たんと産んだってことで、おっかあは表彰されさしたで。昭和十五年やったかや。(「明宝」 p. 12)
- 水沢上の六人衆も、鉄山がすんでまったことで、二人が水沢上を引き払って、近年、わしと時雄さんとこが明山へ出てきて、もう二軒きりになったんや。(「明宝」 p. 13)
- 応順先生は、わたしの体力不足ということを知ってみえたんやと思われるがな。いっぺん、親に頼んでみてやるって言われてな。その結果、いったんは出いてもらえそうになったが、やっぱり、どう考えてみても、工面がつかんでってことで、わたしも、進学はあきらめて、できるだけの百姓をして、ちった好きな本を買って読ましてもらおうぐらいなことでな。(「明宝」 p. 13)

「コトデ」は名詞的要素を介して「デ」に接続する点で「ワケデ」「モンデ」「ンデ」とその構成は類似する。「ワケデ」と同様、「トイウ」「ッテ」「チュウ」などの引用形式を前接させることが多いが、単独で用いられることがないわけではない。

このような述語に直接続く「ことで」は実際にはそれ自体接続助詞として形式化しているとは必ずしも言いにくい点で今回は接続形式のうちに含めなかった。

「コトデ」は引用形式を前接させるため、判断はもちろん働きかけのモダリティにも後接しうる。

- 養泉寺様で読売新聞を取ってみえて、それを一日遅れで、持ちにくりゃ見んかってことで、見せてもらったり、早稲田大学の講義録を、やっとこ頼み奉って、一円二十銭かそこらの購読料を出してらたりな。(「明宝」 p. 13)

- わたしも、ちょっといっぺん、笛の方が大勢あったもんで、唄の方をまねしてみんかってことで、一回か二回口まねしてみたことがあるがな。（「明宝」p. 18）

このようなモダリティ形式に後接する「ってこと」「ということ」は、前件に表される他者による出来事を理由にして話し手が動作を行うことを表すと特徴づけられる。すなわち「と言われたから」という後件の行動の理由を前件が表している点では、判断のモダリティやモダリティ形式を介さないで「こと」が続く場合とは性質を異にする。

3.7.3 「サカイ」類

「明宝」資料のうち当該巻には226話および227話としてあきらかに県外の言語との混淆と思われる語りがある。話の内容からは14歳から24歳まで福井県で過ごされた方ということのみが分かる。

この2話では、接続助詞としての「デ」は一回も出てこない。「モンダカラ」類が5例、「ノダカラ」が4例、「カラ」が7例、「ノデ」が1例、「ンデ」が2例の他、多いのが「サカイ」類である。

述語に直接続く「サカイ」が7例の他、「デスク」あるいは「デスクニ」の形で3例見られる。「サカイ」の例は省略し「デスク」「デスクニ」の用例のみ挙げる。

- ロクロに木地を取りつけるには、ゴヅメという金の爪にくわせて、まっすぐ回うようになったら、カンナを当てて仕事にかかる。大体の形ができると、こんどは、ロクロについている茶碗というものにかち込んで挽くんじゃね。きしんきしんと定規当てて計ってもうてあるですけ、百のうちで、合わんやつは、十か十五じゃ。（「明宝」p. 103）
- ブナの下駄歯は、蒸いて色つけるですけにね。四尺五寸四方、丈七尺ぐらいの木箱を二重にして、隙間へ土入れてまって、絶対息のもれんようにして、大きい釜にかけて二昼夜蒸すんじゃね。（「明宝」p. 106）
- 枕木ってものは、三百や五百こしらえても鉄道省へは納まらんじゃから、ちゃんと枕木業者ってものがおって、それが年に三万とか五万とか請けてきて納めるんですけに。その当時の枕木は、クリとヒノキじゃった。（「明宝」p. 106）

後者の例からも分かるように「デスク」は、「カラ」に対する「ノダカラ」、すなわち「サカイ」の準体助詞を介した形式と考えられる。

3.8 まとめ

以上の考察をまとめると次のようになる。

	デ	モンデ/モンド	ンDデ	ヤデ	ニ
出来事の原因・理由	○	○	○	×	×
判断や働きかけの根拠	○	△	○	○	○
理由を表さない用法	○	×	×	×	○

表2 形式ごとの意味・用法のまとめ

用例数の少ない「ンデ」「ニヨッテ」「ワケデ」「コトデ」などについては省略した。

4. 準体化形式と指定辞

以上、3節までで見てきたようにこの地方の接続助詞としては「デ」が最も基本となっている。そこに「モンデ」や「ンデ」のような体言的要素を介在させた形式や、「モンド」や「ンDデ」といった指定辞を含んだ形式が地域ごとの頻度の違いを含みながら存在している他、体言的要素を介在させないで指定辞を含む「ヤデ」のような形式が一部地域に見られる（「ニ」については本節では省略する）。

これらを手がかりにこの地域における接続助詞における準体化形式の介在について考えてみる。

4.1 指定辞

名詞及びナ形容詞の場合、「デ」は指定辞「ダ」「ヤ」「ジャ」と共に用いられ「ダデ」「ヤデ」「ジャデ」の形で用いられる。これらいずれの指定辞を用いるかについては、指定辞形式の地理的分布に依存する。大雑把に言えば、「徳山」資料のような西濃地域においては「ジャ」、「明宝」資料のような中濃北部や恵那北部地域では「ヤ」、恵那南部地域では「ダ」が用いられている。

「デ」については名詞およびナ形容詞に後接する指定辞を、「モンド」および「ンDデ」については「D」の部分の形式を表にすると次のようになる。「モンド・ムンDデ」および「ンDデ」の「D」が「ナ」である例は見られない。

接続助詞	デ				モンDデ/ムンDデ				ンDデ			
	ジャ	ヤ	ダ	ナ	ジャ	ヤ	ダ	デス	ジャ	ヤ	ダ	デス
「徳山」	17	0	0	1	51	2	6	0	10	3	0	0
「恵那」北	1	12	3	0	6	5	2	0	0	0	0	0
「恵那」南	0	0	12	0	0	0	15	0	0	0	0	0
「明宝」	2	73	0	2	3	80	6	5	6	141	2	11

表3 接続助詞と指定辞

表3から分かることは次の通り。

① 「デ」のみが指定辞相当の位置に「ナ」を取る。

② 「モンDデ・ムンDデ」については、基本的に指定辞として「ダ」を用いない「徳山」および「明宝」資料において、数として多くないが一定数の「ダ」が観察される。「明宝」資料については「ンDデ」についても同様である。

③ 基本的に指定辞として「ヤ」を用いる「恵那」(北)資料においても「モンDデ/ムンDデ」では「ヤ」よりも「ジャ」の方が多い。

歴史的には中世以降、連体形と終止形の区別がなくなり、原因・理由を表す「デ」は直接用言の連体形に後接する代わりに準体化形式を介在させるようになっていったものと考えられている。このことは連体形と終止形を区別するナ形容詞における「連体形+デ」の存在を伺わせるものである。

今回の資料からも次のようなナ形容詞の「連体形+デ」が得られている。

- 「わりゃあ化けるのが上手なでわりゃあ、やかんに化けよう」(徳山 p. 18)
- ほしたら、惣市つあは〈そりゃ、おまいたちや、正直なで、受け取るわい〉なんててくられたがな。(「明宝」 p. 42)
- それがさ、満人を頼むとさいが、満人はふだんは牛みたいなで、あんなことであ、と思うが、どうして、どうして、二畝持っていくんやんな。(「明宝」 p. 92)

臨地調査でも語によって差はあるが、もっとも出やすい「安気」というナ形容詞では、県内広く「ナデ」の形が用いられることを確認している¹⁴⁾。

以上のことから、まず第一に「デ」は連体形接続の名残を残しており、最も古くからある接続助詞形式と推察されること、第二に、「モンDデ」は指定辞として「ダ」を用いる地域から後に入ってきた形式である可能性が考えられること、第三にこの地域でも「ジャ」→「ヤ」の変化が生じたとすれば、「モンDデ」は「ジャ」→「ヤ」の変化が生じる前から用いられている可能性があることの3点が考えられる。

4.2 準体化形式

[1] 準体化形式の非介在

4.1で述べたようにこの地方の「デ」は準体化形式を介さなくても接続助詞として機能する用法を古くから持っていたものと考えられる。

傍証として、美濃地方では動詞や形容詞以外の用言にも指定辞から派生した¹⁵⁾と思われる形式がいくつか後接する現象が挙げられる。

- 行きたかったら、行くじゃわ。
- 旅行に行ってカニを食ったら、これがまたうまいじゃわ。
- おそがくてなも、山伏は。そのうちに、どえらい雷が鳴りだいて、どんなにも一所に座っておれんでなも。ちいとつ、ちいとつ、いざつただつて。(「恵那」(南) p. 182)

上の用例は意志動詞に後接して「行けばいい」と少し冷たく突き放したような促しの表現として用いられる。また、中の用例は状態を表す述語に後接し「うまいんだ」のように話し手の強調という心的態度を表したものである。下の用例は「恵那」資料に散見されるもので、引用を表す形式として準体助詞を介さない「だつて」が用いられている。

いずれも、美濃地方には広く、共通語で準体化形式の介在を要求する位置で準体化形式を必要としないことを伺わせる用法である。「徳山」資料や土岐市周辺で見られた「ヤデ・ジャデ」という接続助詞はこのような現象と関連を持つものと考えられる。

[2] 準体化形式の介在化とその後の「準体化形式+指定辞+デ」の発達

一方で他地域と同じように準体化形式介在への要求が高まった際、美濃地方全般に「モン」を介在させて「モンデ」が発達し、恵那では原因となる出来事によって「トイウ」を介して「コト・ワケ」を介在させて「トイウコトデ・トイウワケデ」が発達したものと考えられる。「ンデ」は後に西の方から入ってきたものであろう。

そして4.1節②から、指定辞として「ダ」を用いる地域から「モンDデ」が入ってきて、それとの類推から「NDデ」が生じた。

以上が地理的分布から推察される通時的変遷である。

なお、蛇足となるが「徳山」資料においては次のような準体助詞的な「ガ」が見られる。

- 瓜姫女郎は初めは泣きおつたが弱ってまってなあ、まあ、泣く声も出んがになってまった。(「徳山」 p. 91)
- そろりそろりところやって縄で下ろいてなあ、よい加減その甕がこうして手が届くがになったもんじゃで(「徳山」 p. 127)

このような準体的な「が」の使用は北陸方言との共通点である(真田信治 1974、江端義夫 1978、山田敏弘 1998 など参照)。このような「ガ」の存在は「ガデ」という接続助詞形式を生じる可能性を示唆するものであるが、現段階では接続助詞「ガデ」の存在は確認していない。

5 おわりに

今回は方言で書かれた資料を中心にそこで用いられている接続助詞について分析を加えてきた。結論はそれぞれの節にまとめた通りであるから繰り返さない。

方言の消失が叫ばれる中、今回扱ったいくつかの形式「ニヨッテ」「ヤデ」「ニ」などは消失の途上にある。機能分化と経済性との釣り合いから単純化され、「デ」と「モンデ・モンDデ」に集約されていくのかもしれない。

資料については繰り返しになるがもう一度ここで述べておきたい。本考察では無意識の使用を探れる談話資料と意識としての臨地調査および内省を併せて用いるという方法を用いてきた。

今回、扱った原因・理由を表す接続助詞は、膨大な資料を繰ってようやく数例見つかったものもある。談話資料は多ければ多いほどよい。『奥美濃よもやま話』は全5巻あわせると総ページ数1000ページ（1ページは22字×44行）ほどが多く方言で語られている。このような資料が存在したことも今回の考察を楽にした。

「昔話はライトされていて十分に話しことばを反映していない」という指摘もあるかもしれない。今回、資料を選択するにあたって岐阜県内の昔話集を見渡したが、会話部分のみが方言（らしきもの）で語られているが共通語をベースとしたものがほとんどであった。また全体として方言で綴られていても、著者によってはかなりライトされていると感じられるものもあった。本としての読みやすさと資料としての正確さを両立させる苦悩が容易に想像できる。

今回、選んだ3資料はそのような中でもっとも話しことばを忠実に写し取ったであろうと感じられるものである点はもう一度強調しておきたい。

注

- 1) 資料として用いたのは、第4巻に収録されている話のうち、192～200, 204～209, 215～218, 221～227, 231～237, 240, 242, 244, 247～250, 254の各話である。
- 2) 「徳山」資料には岐阜市方言の「ヘンビ」に相当する「へっぴ(p. 85)」（蛇）や「喜っで(p. 148)」などの記述が見られる。同様の撥音の促音化と見られる語は「明宝」資料にも「ほっとう(p. 117)」（本当）など、いくつか見られる。
- 3) 「PからQ」の分類を簡単に見分ける方法は、以下の通り。出来事の原因・理由を表す場合のみ「Qのは、Pからだ」と言い換えられる(姫野伴子 1995)。「理由を表さないカラ(白川博之 1995)」は「どうしてQ?」でPを尋ねることはできない。
- 4) 関西出身の学生が授業の感想で「岐阜ではどうしてこれほどモンデを使うのでしょうか。」と書いてきたことがある。また岐阜県立中津高等学校郷土研究部言語班編(1966:9)にも、「標準語」「言ったので」に相当する方言として「イッタモンデ」が挙げられている。
- 5) <http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Gaien/7211/top.html> (2002.7.26 現在)
- 6) 「ゲナ」は美濃地方では一般に伝聞を表す形式として用いられるが、東濃東部の資料には様態を表すと思われる「ゲナ」が散見される。
- 7) 「ンヤデ」の「デ」は、共通語の「ね」に相当する「ナ」が後接していることからわかるように、関

西方言等で用いられるような聞き手目当ての終助詞ではない。

- 8) 土岐市に北接する可児郡御嵩町内での自然談話では次のような用法を確認している。

わたし、こちらえきたじぶんね、ここのことお ちゅーどぐちってゆーんやで、(中略) わたし
ら そーゆーこと いわんもんで わからんやで、ちゅーどぐちって なんのことや

この調査に見られた「ヤデ」は後件、すなわち主節にあたる表現が見られない。この省略された主節を復元できたとしてもそれは前件を根拠・理由として後件の促しを行うような曾根(2000)の表現とは異なるかもしれない。
- 9) 逆接を表さない「に」の存在と後件のモダリティに制限があることは、すでに南不二男(1975)、芥子川律治(1971:213)、曾根(2000)に指摘がある。分布に関しては、新版『日本国語大辞典』によると、順接の「ニ」は長野県、静岡県、愛知県、岐阜県その他、大島でも見られるとあり、馬瀬良雄(1992)に長野県のはほぼ全域と、富山昭(1997:95)に「大井川から西の地域」での使用の記述が見られる。
- 10) 芥子川(1971:213)においてはこの「ニ」に「後続の述語の条件となるものを提示する」用法もあるとするが、具体的にどのような用例がそう認定されるか不詳である。
- 11) この点では関西方言を中心としてよく使われる並列を表す「シ」と共通する特徴を有するものと考えられる。
- 12) 竹内俊男(1982:52)には同様の構成要素からなる「ヨッテニ」の形が愛知県新城市、静岡県新居町にあることが指摘されている。
- 13) この点については調査したくも「ニヨッテ」自体すでに話しことばからの衰退著しい形式である。同地内において、推量や意志の形式として「ズ」を用いる古者はすでに少なくなっているが、その「ズ」を用いる人であっても「ニヨッテ」を意識的に使用している人は今のところ確認できていない。
- 14) このようなナ形容詞のナ形について、岐阜県内で「シンビョウナナー」「チョット ハデナゾ」「ミンナ リョーホー マメナカイナー」などの非連体修飾環境における出現も見られる(小西いずみ p. c.)。このようなナ形は終助詞を伴う環境で現れるが完全な文末では現れないことなどから、連体形用法の拡張と捉えられるのではないだろうか。ただ、ナ形がこの地域において歴史的に連体形であり続けたかなど精査する必要はあると考えられる。
- 15) これら終助詞化した「ジャワ」の「ジャ」が「ダ」となった「行クダワ」も筆者自身の記憶にある表現形式である。このことからこれらの終助詞は指定辞から派生したものと考えてよいであろう。ただし「行クヤワ」は使用された記憶が薄い。今回も指定辞としては「ヤ」を用いる東濃の数地点で「行クヤワ」ではなく「行クジャワ」の使用が認められた。すでに化石的に封じ込められた形式である。

付記

本考察は、第2回方言文法研究会(2002.8.7 於 国立国語研究所)にて口頭発表し、会の出席者から多くの貴重な意見を頂き、一度、同名タイトルにて『岐阜大学教育学部研究報告』(51 巻 1 号, 2001 年)に原稿化したものをベースに、多少の改稿を加えたものである。

調査にご協力いただいた方には深くお礼申し上げます。また、御嵩町広報広聴係、明宝村博物館(同教育委員会)、藤橋村歴史民俗資料館(同教育委員会)、恵那市図書館、金山町教育委員会、多治見市教育研究所、土岐市教育研究所の職員の方にはたいへんお世話になりました。記してお礼申し上げます。

なお、本考察で資料として用いた『奥美濃よもやま話』の著者である金子貞二氏は2001年12月19日89歳にて病没された。郡上郡明宝村の方言を伝える貴重かつ不朽の宝である膨大な方言資料を遺された金子貞二氏のご冥福をお祈りしたい。

参考文献

- 江端義夫(1978) 「「が」準体助詞の遺存分布考」『国文学』79
- 久野マリ子編(1996) 『否定・仮定表現の変容-西美濃大垣市における動態と方言のイメージ』 國學院大學 日本文化研究所
- 芥子川律治(1971) 『名古屋方言の研究』 名古屋泰文堂

- 佐竹久仁子(1984)「～もので/～ものの/～ものを」『日本語学』3巻10月号 明治書院
- 真田信治(1974)「越中五箇山方言での連体助詞「の・が」」『金沢大学語学文学研究』5 (『地域語への接近』秋山書店1979再録)
- 白川博之(1995)「理由を表さない「カラ」」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版
- 曾根彩恵子(2000)「岐阜県東濃(土岐市)方言の接続助詞「デ」と「ニ」の用法」『名古屋・方言研究会会報』17
- 竹内俊男(1982)『東海のことば地図』六法出版社
- 富山昭(1997)『しずおか方言考 読んでごろじ』静岡新聞社
- 岐阜県立中津高等学校郷土研究部言語班編(1966)『中津川を中心とした恵那言葉の研究I』
- 野田春美(1997)『「のだ」の機能』くろしお出版
- 野辺博子(2000)『ダムに沈む昔話の世界 たあばあちゃんの昔がたり -増山たづ子・旧徳山村の昔話』株式会社インテグラ・ジャパン(CDブック)
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版
- 姫野伴子(1995)「「から」と文の階層性 1-演述型の場合-」『阪田雪子先生古希記念論文集』三省堂
- 前田直子(1996)『日本語複文の記述的研究』大阪大学博士学位認定論文(未公刊)
- 馬瀬良雄(1992)『長野県史 方言編』長野県史刊行会
- 三尾砂(1958)『話しことばの文法』法政大学出版局
- 南不二男(1975)「東海の方言 3. 文法 ハ、「理由」の意味を表す接続助詞」大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語-日本語方言学概説』筑摩書房
- 山田達也・山口幸洋・鏡味明克(1992)『東海の方言散歩』中日新聞本社
- 山田敏弘(1998)「五箇山・白川郷方言における連体及び準体的なノとガについて-その消失と保持の方向性」『富山国際大学紀要』8、富山国際大学